

## 7 ダンテとマルコ<sup>1)</sup>

一千三百年のある日、一人の男が世界に旅立った。といっても、その行き先はこの世のどこかではなかった。あの世であった。人生の旅路半ばにしてふと暗闇の森に迷い込み、そのまま地獄・煉獄・天国の三界を巡ったというダンテ・アリギェーリ、イタリアはフィレンツェの詩人である。そしてその旅を一巻の書に詠い、それを「神曲」と名付けた。

それによると、地獄はエルサレムの地下深くにあって地球の中心にまで至り、煉獄はその対極の海上に浮かぶ島の上にある、その山上に地上樂園があって、そこから天国に昇る、天国は十層をなして地球を包み、その至上の高みに神がまします。旅人は、それら三界の有り様をつぶさに観察したのみならず、地獄では罪を罰せられ、煉獄では罪を浄め、天国では罪なき至福の愛に包まれている靈魂、すなわち今は亡き者たちと出会った。そこには、「主が創り給うた人類の始祖アダム」を始めとして、古今の英雄・聖者や歴史上の偉人・貴顕のみならず同時代の名士や知己までが全ていた。そして最後にはキリストと一体となった神をも目にして地上に戻って来た、と言うのである。わずか一週間7日の短いものであったが、その旅は空間的にも時間的にも、世界といわんよりは宇宙全体を巡るまことに壮大なものであった。とすれば、この詩人こそ史上最大の旅人、否最初の宇宙旅行者と呼ばれてふさわしいのではあるまいか。

しかし同じ頃もう一人、古今最大の旅人と呼ばれた者がいた。その5年ほど前、二十数年にわたる東方への旅からイタリアに帰って来たというマルコ・ポーロ、である。その旅もまた壮大なものであった。1271年ごろ父・叔父とともにヴェネツィアを発って陸路東の果てにまで至り、帰りは南の大洋を回ってインドを経て1295年に故郷に還り着いた、つまり当時知られていた全世界今でいうユーラシア大陸を一周してきたと言うのである。そしてその旅を一巻の書に編み、それを「世界の記」と名付けた。彼もまた、「主なる神が自らの手で我らが始父アダムを創り給いしよりこの方」、世界を最も広く探索した者だと言う。では、古今最大の旅人との誉れは、かのフィレンツェの詩人に冠されるべきか、それともこのヴェネツィアの若者に帰されるべきか。

## ＜ダンテの旅＞

ダンテの宇宙は、この世・あの世といった漠然としたものではない。視覚的かつ科学的に明確な構造を持つ。まず、天動説で地球は宇宙の中心にある。地獄は、地上世界の中心であるエルサレムのクリストの墓の真下に広がり、漏斗状に狭まりながら九層をなして地球の中心にまで達する。地獄の底には、天から落ちて来た大魔神のサタンが逆様に突き刺さっており、そこからレーテ（忘却）の川を伝って正対極点の海上にある煉獄島に至る。煉獄は螺旋状に二つの前域と七つの冠からなる山で、その山上に地上楽園がある。その楽園から天国に昇り、月天から始まって水星・金星・太陽・火星・木星・土星・恒星・原動の九天が重層的に地球を取り巻き、さらにその上地球から6千マイル（約9千キロ）のところ到最后の至高天があり、その彼方に神がまします。

以上が外枠となる空間だとすれば、その内に流れるのは、天地創造の初めから最期の審判の終末に至る時間、つまりキリスト教ヨーロッパの歴史と文明である。登場するのは、最初の人間アダムとエバから始まって、アブラハムやモーゼら旧約の族長たち、ピエトロやヨハネら新約の使徒たち、聖母マリア、その後のグレゴリウスやフランチェスコら聖人・聖者、またゼウスとヘラを祖とする古代ギリシャ・ローマの神々と英雄たち、アレクサンデルやカエサルから始まってシャルル・マーニュ、そして当時のフェデリーコ2世にまで及ぶ王侯・君主たち、ホメロスやプラトン・アリストテレスを始めとしてトマス・アクィナスやボナヴェントゥーラら古今の学者・文人たちであり、彼らの偉大な功業や事績が世界全体の歴史として語られる。そして最期には、それ全てに神の審判が下る。では、その天上から見た地球は、どんな姿をしていたか。

いよいよ原動天に昇る前、ベアトリーチェに促されて最後の一瞥をくれた地球は、「ガーデの彼方にはウリッセの狂気の船が、此方にはエウローパが甘味な荷となった岸近くまでが見えた。そして、この小さな麦打ち場のもっと多くのところが見えただろうが、太陽はすでに私の足元から黄道の一宮よりさらに離れたところを進んでいた」（Par. XXVII. 82-87）<sup>2)</sup>。すなわち、スペイン沖（オデュッセウスが還らぬ人となったカディス島の彼方）からフェニキアの岸（エウローパがゼウスに奪われた所）までが見えた、もし太陽の位置さえ違っていただけなら、地球（この小さな麦打ち場）のもっと多くの部分が見えたであろうに、と。これは、史上最初のヨーロッパ立体図であり、地球の最初の航空写真であった。

このように、地球についてもダンテは明快で科学的である。球形で、全体を大洋（オーケアノス海）が取り巻き、北は陸の、南は水の半球、そこに古来の未知の大陸はなく、代って前述煉獄島がそびゆる。陸は、エルサレムをいわば頂点としてその外円上左右に90度ずつ広がり、西の果てはスペインのイベロ川、東を

限るのはインドのガンジス川、北の果ては古来北限とされたリーフェイ山脈、南はリビアあるいはエチオピアの名で呼ばれるアフリカである。数値も明記される。頂点のエルサレムから赤道上の東西の両端までそれぞれ6千マイル、したがって地球の外周はその4倍、2万4千マイル（約3万6千キロ）となる。現実には約4万キロだから、少し小さい。とすると陸は、エルサレムを中心に東西180度南北90度に広がっていたわけで、つまり地球の4分の1に当たる。これが、ダンテの知見の及ぶかぎりの世界であった。

しかしそれ以外の部分、その裏側やインドよりさらに東がどうなっているかの明記はなく、空白のまま未知に残る。また、その4分の1の部分においても、彼の目に止まるのは、南は地中海アフリカ沿岸から北はイギリス・アイルランドまで、西はスペイン・ポルトガルから東はギリシャとエルサレムまで、つまり実質的にヨーロッパ・キリスト教世界であって、その東に連なるペルシャやインドが具体的に描かれることも、ましてやモンゴルやカタイが言及されることも一切ない。

時間も明確な数字を持つ。アダムの誕生はキリストの死の5232年前（地上楽園で930年、地獄の辺域で4302年）、今はその死から1266年、したがって天地創造から6498年が経っている。が、語られるのは、地表同様専らその間のヨーロッパキリスト教世界の出来事であり、それ以外の部分で生じたこと、すなわち東方その他の地の歴史や文明が記述されることもまずない。以上がダンテの全世界であった。

#### <マルコの旅>

その部分、まさにダンテの地球で空白のままに残された地を巡ったのがマルコの旅だった。ちょうどその東端エルサレムから出発し、小アルメニア・トゥルコマニアとアナトリア半島をかすめ、ペルシャを横断し、インド北部パミールから西域に入り、大砂漠とモンゴル高原を伝ってカラコルムに至り、そこから草原を渡ってシャント上都、そしてグラン・カンのいるカンバルク大都に着く、これが往路である。その大君の国では、使者として諸方に派遣されカタイとマンジの各地を巡った、と言う。帰路は、ザイトン泉州から船出し、南の海を東南アジアの島々、インドを経て再びペルシャに上陸し、終着点はこれまたダンテのもう一つの東端コンスタンティノポリスであった。また、自ら足跡を印してはいない周辺の他の地域も望見した。北はロシアからチオルチャ（満州）にかけて、東は大洋はるかに浮かぶ黄金島ジパング、南は大洋の島々とアフリカ、そして中央と西のアジアである。と、まさしくダンテの地球で封印されていた地域であった。それをポーロは、26年の歳月をかけて辿り、海を回ってヨーロッパに帰還した。かく、

ダンテの旅がいわば形而上下の両世界を垂直に飛翔するものであったとすれば、マルコのそれは、地表を虫のごとくに水平に歩むものであった。が、地球に関してはその軌跡はダンテよりはるかに大きく長く、また十分に明快であった。

時間も、その歩みとともに流れる。そこに登場するのは、旅に沿って出会った都市・自然・事物・人々であり、語られるのはその姿と出来事である。三重に城壁をめぐるせたカンパリク大都、絹を積んだ千台の車が毎日出入りすると言うキンサイ杭州、屋根と床が黄金で造られているというジパング、胡椒の森のどこまでも広がるインド、しかし大部分は旅の途次の町や都市、そこに生きる無名の人々とその行い、珍しい事物や驚くべき自然の姿である。タルタル人の起源や戦いなど、時に古に遡って歴史がたどられることはあるが、あくまで一民族の過去であり、それが天地創造から終末に向かって流れる時間の中に置かれるわけではない。宗教もまた、偶像崇拜は非難・否定されるが、彼らの始祖セルガモニ（釈迦牟尼）はキリストと並ぶ聖者ではあっても、地獄に墮されることはなく、登場する西方の聖者は聖トマスのみ、英雄はアレクサンデル一人であり、これとて東方との縁ゆえであった。こうして登場する人々は、領土・人民・財宝において並ぶものなきグラン・カン・クビライを含めて、その地で今を生きているあるいは生きた個々の人間であって、神の審判の下に置かれることはなかった。

#### <世界>

フィレンツェの詩人は、地獄・煉獄・天国の三界構造を立体的に美しく完成させ、その中にアダム誕生以来人類6千年の歴史を通し、そこに生きた全ての人々の霊をそれぞれしかるべき場所に配した。それまでにももちろん地獄も天国もあったが、三界がこれほど見事に視覚的に明快に、また形而上下に豊かに語られ描かれたことはなく、ここに人類史上初めて宇宙の全体像が明示されたと言ってよい。『神曲』La Divina Commedia<神の頌歌>とはまさにそのこと、神の創った世界・宇宙を頌め讃えて歌うことを言う。いわば、神に代って「世界」を創作したのだった（ちなみに、上述したごとき煉獄は全く詩人の独創）。しかし、それはあまりにも僭越なら、外には天にも達する尖塔と鐘楼、内にはキリストの十字架像とそれを取り巻く聖母と聖者たち、窓には輝く光の差し込むステンドグラス、そして壁には歴代貴顕の礼拝堂が並ぶ、壮大なゴシック建築の大聖堂を打ち建てた、と喩えられよう。

ところがその大聖堂が立つのは、古代ギリシャ・ローマの礎の上にできたキリスト教ヨーロッパと呼ばれる地であった。その外は、西は海、北は蛮地、南は酷熱の大陸、そして東は古代ギリシャの敵ペルシャとその後の教敵イスラムを隔てて「高木の森」のインドで限られ、さらにその東には何があるのか、たとえ未開

でも人間が住んでいるかすらわからなかった。これがダンテの、また当時のヨーロッパの知の及ぶかぎりの「世界」であり、一般の人々のそれは、さらに狭かったことであろう。

その大聖堂の外にある地域、それをたどり記したのがマルコの旅とその書であったことはすでに述べた。ここに世界は、ようやく水平方向にもその現実の姿を現した。まだまだ未知の部分は多かったにしても、地球はその全貌を見せ始めた。その裏側が明らかにされるには、200年後のコロンブスを待たねばならなかったが、そのことはここではとりあえず置いて置く。時間的にはマルコが先ダンテが後であったが、時代的・文明的には逆で、前者が後者を補完する形となる。ダンテの世界はそれまでの集大成であり、ヨーロッパ・キリスト教世界という狭く限定されたものであったのに対して、マルコの世界はこれからの案内図であり、姿を現しつつあった東方世界、否全世界の見取り図を提供するものだったからである。もっとも、全世界といってもそれが開示されたのは西方に限られ、東方はそのスケールの大きさと豊かさで当時これらに匹敵する旅と書を持たなかった。

#### ＜ウェルギリウス「アエネーイス」＞

それにしても、ダンテはどのようにしてかくも壮大な世界、しかも彼岸という異界を旅することができたのか。「導師」を持ったからである。地獄と煉獄は古代ローマの詩人ウェルギリウスが、天堂は永遠の女性ベアトリーチェが案内役をつとめる。故郷フィレンツェにほど近いマントヴァ生まれのウェルギリウス、その人は彼にとって言葉つまり文学の師であったばかりではない、その叙事詩「アエネーイス」で、ギリシャに敗れて流浪の旅に出たトロイアの遺児アエネーアスをしてラティウムの地にローマを建てさせた、イタリア建国の父でもあった。ギリシャの文明はそうしてローマに引き継がれ、そしてこのフィレンツェの詩人に伝えられた。「アエネーイス」は実際、ダンテの宇宙のモデルであった。やはり一つの旅の文学であり、アエネーアスもまた冥界を巡る。<sup>3)</sup>

トロイアから渡ったカルタゴで結ばれた女王ディードを捨て、セイレーンの誘惑を振り切ってイタリアに着いたこの英雄は、カンパーニア地方クマエの地で、さる聖林に囲まれた洞窟の地下深くにある冥府に下って行く。そこで巫女シビュラに案内されて、アエネーアスは父アンキーセスの霊と出会って過去を知り、また自分とイタリアの未来の予言を得て、地上に戻る。ただし古代の冥界は、死者の靈魂が全て行くところで地獄と天国の区別はなく、一方では罪の亡霊たちが罰を受け、城壁と門で仕切られた他方には幸福な霊たちが住む。浄罪界はない。天界はギリシャ・オリンポス山の頂にあり、そこからジュピテルを始めとする神々が英雄たちと人間世界の全てを取り仕切っていた。

一方地球は、オーケアヌス海の西の果てで巨人アトラスの肩の上に天空ともども支えられて廻る。地上は、トロイアとローマを結ぶ線を中心として、西は同じくイベリアとジブラルタル、南もやはりエチオピア・ヌミディアのアフリカ、北はゲルマニアからカウカスとヒュルカニア（カスピ海東）にかけて、東はやはりインド・ガンジス川で終わる。しかしこれらも、それぞれの最果ての地として挙げられるだけであって、事が生起するのはギリシャとローマの古代地中海世界に限られる。つまりダンテの知見の世界は、キリスト教を除けば、導師古代ローマの詩人ウェルギリウスのそれとほぼ同じであった。といってももちろん、かの14世紀の大学者がそれ以外知らなかったというわけではなく、古典の学と権威に忠実だった彼は自分のよく通じていぬ世界、東方は封印してしまったのだった。

### ＜マルコの導師＞

では、マルコはどうしてかくも広大な世界、しかも東方という異界を旅することができたのか。彼も、「導師」を持ったからである。しかも三人あった。一つは父ニコロと叔父マッテオで、文字どおり師父である。そもそもかの旅が実現したのは、二人がすでに一回目の旅を行い、クビライとの約束を果たすべく再び東方に出掛けた際に、息子マルコを伴ったからであった。その後も最後までほぼ常に行動を共にしたことであろうし、実質的に生活と行動の導き手だったに違いない。すなわち、商の先達であり旅の導師であった。

もう一人は、そのクビライである。二人に伴われ来たった若者マルコをグラン・カンは大いに嘉し、使者として諸方に派遣したと言う。それがもし本当なら、大君はポーロの生活を支え、中国のみならず広くアジアを見聞する機会を与えたことになる。つまり、主君あるいはパトロンとしての導師である。真偽の程は分からぬが、一介の商人であったポーロがそうした機会を手にするには、その権威と信頼なくしては難しかったろうというのも確かである。

そしてもう一人は、その旅をマルコに代って書き表した編者ルスティケッロである。つまり言葉の師で、ダンテにとってのウェルギリウスに当たる。実際彼は、書では自ら「師」と名乗って登場する。ただし、文学の「先生」という意味ではなく作家、さしずめ文筆を生業とする「親方」というほどの意味であるが。しかしその存在は大きく、実質的な作者であった。旅と書という、「神曲」ではダンテが一人で担っていた二重の役割は、ここでは旅する人であるマルコと書く人であるルスティケッロに分かれる。のみならず、現実に足跡を印した地を超えて全世界を望見させたのも、彼であった。つまり、書の師である。ではマルコは、この師をどのようにして得たのか。（彼岸の世界に渡らなかったポーロは、ダンテのベアトリーチェに当たる導師は持たなかった。）

### ＜ルスティケッロ・ダ・ピーサ＞

1295年、二十数年にわたる旅から帰ってきたマルコは、おそらく翌年再び東方に向かわんとしたところを、地中海の覇権をめぐる激しく争っていたライヴァル都市ジェノヴァに捕えられ、その牢に連行される。そこには、やはり敗れたもう一つの都市ピーサの何千という捕虜があったが、その中にルスティケッロがいた。彼は、兵士や商人ではなく作家であった。どのような経緯があつてかは何一つわからないが、ともかくもこうして二人の間で出会いがあつた。そして、ヴェネツィアの若者は彼に自分の東方への旅の見聞を語り、また再び交易に役立てるべく携えていたメモ・ノートや他の書き物を見せたのであろう。それが事実でありまた驚くべきものであることを理解した作家ルスティケッロは、書き記して世に出す価値のあることを見て取った。何よりもそれは、当時の西方の人々には知られていなかった広大な未知の世界を、その驚くべき姿のままに開示するものだったからである。囚われの身の鬱屈もあつたろうが、再び筆を取りたい、そして名を上げたいとの思いも強かつたろうし、マルコとて同じ思いであつたに相違ない。

しかし、世に出すにはそのままでは通じず、旅のメモや各地の記録を人に読んでもらうだけの文に表し、興味あるものにする必要があつた。17歳にして旅に出た商人の息子マルコは、そうした教養と習慣を十分には持ち合わせていなかった。当時の一般向けの書といえば、宗教ものを別にすれば、愛の叙情詩か騎士たちの冒険物であり、ルスティケッロは後者の練達の書き手であつた。とこのようにして、マルコが語りまたメモ・ノートその他を見せ、作家がそれを聞き読みまた他の書き物をも合わせて、二人の共同作業によって一つの書が編まれることとなつた。

このピーサの作家については、1271年ポーロ三人がヴェネツィアを発つたのと同じ頃、フランス語で書かれた、「メリアドゥス」とか「パラメード」とか呼ばれるアーサー王円卓騎士の物語のあることが知られるだけである。その他には確かなことは何一つ分からない。写本は幾つか残っており、散文ものではイタリアではよく知られた作家だつたと見られる。では、その騎士物語とはどのようなものだつたか。

### ＜「メリアドゥス」＞

「帝に王、君に公、侯に伯に男、騎士に陪審に市民の殿方、それに物語を楽しむ才をお持ちのこの世の御方は誰あれ、この書を手に取って隅から隅まで読ませ下され」と、王侯貴族への呼びかけに始まる<sup>4)</sup>。そして、「ウーテル・パンドラ

ゴン王の時よりこの方、その息アルトゥ王と円卓の仲間たちの時に至るまで、遍歴の騎士たちの間で繰り広げられたる大いなる冒険を全てご覧になれましょう」と、主題は騎士たちの冒険であることを告げる。続いて、「この物語は、イギリス王オドアール卿が我らが主なる神に仕えて聖墓の征服に海の彼方にお渡りになったおり、その書物から訳されたものであることをとくにご存じありたい」と、自分の創作ではなく翻訳であることを素直に告白する。ただし、イギリス王エドワードとの関係は確認されない。さらに、「上にその肖像の掲げてあるルスティショー・ド・ピズ師がこの物語を編んだ、すなわち、その書に見られる全てのいとも驚くべき話と全ての大いなる冒険を訳したのである」と、自ら「師」を名乗り、実際冒頭には自画像が掲げられてある。自信家で名誉欲も強かったのであろう。がその画は、残念なことに消えかかって師の姿は判然としない。

そして以下、アーサー王の父に仕えたという老騎士「ブラノル・ル・ブリュ卿」から始まって、「レオノワのメリアドゥス王の息トリストアン」と「ランスロのランスロ」を中心に、異教徒の騎士パラミデス、ガウェイン、妖姫モルガンとモルドレッド、ラモラ、ランスロの息子ガレオットらの戦いが、延々としかも入り乱れて語られる。彼ら自身が繰り返し活躍するだけでなく、他にも大小有名無名の数え切れないほどの騎士が登場して矛を交わす。多くの話は、一人の騎士が冒険を求めて遍歴の旅に出、途中別の屈強な騎士と出会うと槍や剣の戦いとなり、時に決着がつかずして友情を結び、時に危機に陥るが仲間が現れて援け、時に相手を倒す。あるいはまた、敵や悪漢と出会うあるいは襲われるが、激しい戦闘の末勝利する、といったものである。戦いと友情と少ないが貴婦人への愛という、騎士物語のお決まりのテーマ以外のことが描かれることはまずない。騎士たちがいかに強く武に長じているか、その戦いがいかに激しく残酷なものであるかが描写されるだけで、その人物や心理、情景や生活が描写されることはない。文章は冗長で定型の語句や表現が繰り返され、人物関係は複雑に絡まり、ストーリーは重複し混乱する。最後は、トリストアンとコンウォールのマルク王の妃イズーの恋で、トリストアンは嫉妬した叔父王に毒槍で刺されて斃れ、イズーも彼への愛ゆえに自ら命を絶つ。その死を伝え聞いたアルトゥ王は、残った騎士たちを集めランスロ卿もやって来、皆その死を悼んで哀悼と哀歌を捧げ宮廷全体が喪に服したのであった、となって終わる。

つまりルスティケッロの騎士物語は、プロローグで正直に告白していたとおり、当時出回っていたフランス語やラテン語のアーサー王もの、とりわけ「散文トリストアン」「湖のランスロ」「聖杯の探求」「パラミデス」等の騎士たちの冒険、その戦いを、翻訳したり要約したり断片をつなぎ合わせたりして、「編んだ」ものであった。どこまでが種本のもので、どこからが彼のものかはっきりしないが、おそ

らくは大部分前者のもので、それに大仰な表現を加えることはあっても、ストーリーを忠実にたどり、内容に介入することはなかったのであろう。しかしその時、個々の戦いをただ並べたわけではなかった、上のごときプロローグから始まって下のごときエピローグで終わるまで、全体を「師」ルスティケッコが語る一つの「物語」とした。一つの話（戦い）ごとに自分が語り手として登場して進行させるのである。「物語は言う」あるいは「師は語る」と始め、「ここで語るのを止める」と終って次に移る。また、個々の場面でもその語り手が頻繁に登場して、「さて皆さんに語ろう」とか「ご存じありたい」との口上で始まり、「で何を言おうか」の句とともに進めてゆく。前面に出てくるのは戦う騎士ではなく、むしろ語るルスティケッコである。この言葉を先取りしてよければ、一種の「枠物語」となった。（そうした一例として、最初の老騎士の次に置かれている、トリスタンとパラミデスおよびランスロの戦いを訳して本書巻末に掲げる。<sup>5)</sup>

最期に師は、次のように語って、けっこう大判の羊皮紙 106 葉に渡るその長大な物語を締めくくる：「長くかかったがようやく今、智と力を与え給うた神のお陰で、私はこの書を書き終えた。イギリスのヘンリー王は、隅から隅まで目を通し大いなる喜びをもって読み給うた。しかし彼は、ラテン語の書の中にまだフランス語に訳されていないずっと多くのものを見出し、私にもう一度別の書に取り掛かるよう求めた。で私は、本書の終わりで主君に約束する、この冬の寒さが過ぎ去って 4 月という快い季節になったれば、一年掛った本書の大仕事のあと少し休んで、他の本に再び取り掛かろう」（要約）。

### ＜「世界の記」＞

かくて 1298 年、冬の寒さが一度ならず二十数回も過ぎた後ではあったが、「師」はようやくその約束を果たす。もっとも、今度は騎士の冒険ではなくヴェネツィアの若者の旅の話であった。今度は手本はなかった、他人の種本から訳したり引き写したりすることはできなかったが、材料は豊富にあった。ポーロの持ち帰った情報である。それがどのようなものだったか何一つ残っていないが、おそらくマルコの直接の話と説明、メモ・ノートなどポーロたち自身の旅の記録、そして他の人たちの手になる書き物・資料の三種類からなっていた。それに、作家自身の知識や手元にあった書物も使われたことも間違いない。ではそれら材料を、ルスティケッコはどのように編んだか、いかに書き表したか。

ポーロの旅と体験の大きな価値、当時の西方の大部分の人々にとって知られざる土地や人々の現実を明かす稀有なものであることを理解したルスティケッコは、それを単にマルコの旅の記録としてではなく、全世界を記述するものとして構想する。冒頭に掲げられたタイトル「世界の記」は、そのことを示す。そして、そ

れを三つの部分に構成した。一つは、ポーロの旅、すなわち父と叔父の最初の東方行とマルコを連れての二回目の旅の経緯を一つにまとめた前篇、もう一つは、往路とカタイ・マンジつまり中国と帰路の各地を記す本編、三つめは、そのルートから外れた周辺のアジア諸地域について述べる後編である。そして作家ルステイケッロは、そのそれぞれに前の騎士物語の手法を用いた。

ポーロの旅を語った前篇には、騎士の遍歴というプロットを当てはめる。東方への旅に出た若武者マルコが大君の宮廷に至り、諸国を遍歴し、各地で数々の冒険すなわち驚くべき事どもと出会ったあげく故郷に帰還する、という筋書きである。が、ポーロは商人で騎士ではなかった。そこで作家は、彼らを使者に仕立てる。最初父ニコロと叔父マッテオの二人は、東方へ商売に出かけたさい、クビライのもとに赴くさる使者殿に連れられてグラン・カンの宮廷に至り、教皇への使命を託されてヴェネツィアに戻る。その使命を果たし、今度は教皇の使者となって息子のマルコを連れてクビライの下に向かう。三年半にわたる旅の末その宮廷に着き、御前に伺候した若者マルコはグラン・カンに嘉せられ、使者として各地に派遣された。その報告がこの書である。その許にあること 17 年、望郷の念止み難く帰国の願いを申し出ても、3 人を愛する大君はこれを許さない。が、ベルシャから君主の妃となる姫を求めて三人の使者が派遣されて来ており、彼らに同行してその姫を送っていくという使命のもとに帰国を許される。かくて、東方にあること 26 年にして、ようやく懐かしの故郷に帰り着いたのであった、と。主人公マルコはさしずめトリスタン、アーサー王はクビライである。が、真偽のほどはわからない。

その旅で見聞された各地の様子や出来事を記した二番目の本編は、マルコの話とポーロたちのメモ・ノートその他の書き物に基づいたのであろうが、ルステイケッロはそのまま書き写したわけではなかった。提供された材料はおそらく膨大なものであったろうが、大きく分けて 2 種類の情報からなっていた。一つは、距離や行程、位置や地理、人種や民族、宗教や歴史、商業と商品、産業と製品、為政者や君主、自然や動植物など、いわば一般情報とでもいうべきもの、もう一つはその中でもとりわけ珍しいもの・異なること・驚くべき事ども、あるいは他の特に記すに値する事柄、奇妙な風習・信じがたい出来事・魔術的な宗教・珍しい産物・莫大な財宝・驚くべき人間や珍奇な動物たち、である。前者、とりわけ商に関わるもの、の方が多く詳しかったであろうが、ルステイケッロは当然ながら、後者の方に惹かれた。で、前者は必要最低限のことを淡々と記し、後者は強調・誇張・書き換えはもちろん、時に捏造や創作も加えてそれぞれを興味深い一編の話に紡ぐ。事実とは乖離することもあったろうが、それによって事物や人物は生氣を与えられ、書は記録や紀行とは違った物語的性格を獲得した。

しかもルスティケッロは、この部分をポーロの旅とは切り離して記した。彼らの旅にまつわることは、ごく僅かを除いて出て来ないし、マルコもめったに顔を出さない。出来事であれ事物であれ、彼の見聞としてではなく、ありのままの姿、客観的な現実として提示する。また、ここでも彼は独創的な作家ではなかった、語ることに徹し、自身の感想や判断を差し挟むことを控える。そして各地を、大部分は彼らの行程沿いにあったであろうが、それぞれ独立した都市や土地として並べ、前作の騎士物語の挿話でと同じく、筆者が語り手として登場して、「どこそこについて述べる」とか「いかになしたか」の口上で始め、まず一般情報次いで特記事項を記し、それが終わると最後に、「さてこれでおき、次は」と締めくくって次に移る。また、個々の事項についてもほぼ常に「皆さんに言おう」とか「ご存じありがたいが」の語り手の口上で始まり、「で、何を言おうか」とか「長話しはさておき」の口調で進行し、「これで措いて次に移る」との句で終わる。つまりこの本篇では、主題はそれぞれの町や都市そこでの出来事や事物であり、前作「メリアドゥス」での騎士たちの個々の冒険に当る。そしてここでも前面に出てくるのは、旅したポーロではなく、語るルスティケッロである。こうして書は、マルコの旅行記ではなく、ルスティケッロの語る世界各地の物語となった。

そのことは、書に思いがけない性格と効果を与えた。各地・各事項が、旅し見聞した当人であるマルコの私的な体験や感情、および記述したルスティケッロの思想的・宗教的判断から自由になることができたのである。わずか数行で済まされた町も数ページを掛けて詳述された大都市も差がなくなり、一つ一つの都市や事柄が客観性と独立性を獲得した。さらにはまた、西方ヨーロッパと比較されることもなかった。カルピニ・ルブルク・シモンら当時の西方人の東方記にすでに萌していた、文明ヨーロッパに対する未開アジアの構図はどこにも見られないし、「野蛮」の語は一度も出てこない。このこともまた、同書がマルコ・ポーロの「見聞録」でも、ルスティケッロの比較文明論でもなく、客観的な「世界の記」であることに貢献した。この点でも、「神曲」がまさにダンテその人の思弁と想像の産物であり、登場する人物や出来事が全て彼の審判の下に配され断罪されていたのと対照的であった。こうして、かの「神の頌め歌」では「小さな麦打ち場」として蔑まれたたっていた地球の、空白のまま捨て置かれていた未開の東方は、現実の人と物と事で埋められ、それに劣らぬ豊かで密度の濃い空間となったのだった。

そして最後のアジアの部、これは全くのルスティケッロの戦記物語である。この後編は、書を名実ともに「世界記」とするために、本編でのルートから外れたあるいは取り上げられなかった諸国・諸地域をカバーするものだった。カイドゥのトルキスタン、ペルシャのイル・カン国、南ロシアのキプチャク・カン国、ロシアを中心とする北方の地、からなる。しかしそこで記されるのは、北方の地

をのぞいて地誌ではなく歴史である。しかも戦、トルキスタンはカイドゥとクビライの、イル・カン国はフラグからカサンにいたる歴代君主の、キプチャク・カン国はベルカからトクタイとノガイにいたるまでの君主たちの戦いである。それをルスティケッロは、騎士たちの戦いと同じ手法で紡ぐ。ポーロの旅とは一切関係なく、マルコが顔を出すことも一度とてない。

ある時、権力や領土の奪い合いによって争いが持ち上がり、互いに使者を派遣して相手を非難・挑戦し、味方を集めて演説で士気を鼓舞し、ともに譲らずして決戦となる、数万数十万の騎兵・歩兵を率いて戦場の平原に向かい、双方陣を布いて相対し、ある日の朝ナツカルの音とともに戦端が開かれる、まず弓矢が雨霞と飛び交って天を覆い、矢が尽きると武器を手に両軍突撃し、手足頭が切り飛び、人馬は地に墜ちて終え、阿鼻叫喚で雷神も聞こえない、とうとう最後にどちらかが勝利し、逃走する敵を追って切り殺し、あるいは決着がつかずして引き揚げる、と。どの戦も全てこの形で進行する。そして、騎士同士の一騎打ちと数万の大軍の合戦の違いはあるが、戦いの場面や騎兵同士の決闘の描写、語句・表現・常套句は、ここでも前作騎士物語と同じで、前に見たルスティケッロの語りの内に進んでゆく。

ルスティケッロのこの手法と編集方針はしかし、一個人の旅行記ではなく世界記としての普遍性と物語としての面白さを与えて、その書を後々まで読まれるものとする一方、疑惑と不信を惹き起こさずにはいなかった。一つには、かく前編と本編・後編が切り離されることによって、前編で述べられたポーロの旅と本編で記述された事柄が相互に裏付けられず、その旅が本当に行なわれたのか、またそこに書かれてあることが確かに事実なのか、どちらも疑わしいものとなったからである。もう一つには、マルコに代ってルスティケッロが語ることによって、その書がいったい誰の手になるものなのか、曖昧なものになった、つまり旅と書が分離してしまったからである。しかし世に出るや、本当かもわからぬ、誰が書いたかもわからぬ、しかし興味尽きせぬ未知の世界の物語として博く受け入れられたのであった。

- 1) 初出：『マルコ・ポーロとルスティケッロ——物語「世界の記」を読む——』近代文藝社 2016、pp. 18-33。この稿は主に、拙稿「ジパングの系譜(1)ーダンテ『神曲』の東方」、同「ルスティケッロ・ダ・ピーサーマルコ・ポーロ旅行記の筆録者」、に基づく。
- 2) Dante Alighieri, *La Divina Commedia*, a cura di Tommaso Di Salvo, Zanichelli, 1991, pp. 511-2 (天国編第 27 歌 82-87 行)。
- 3) Virgilio : Liber VI, pp. 206-52; ウェルギリウス (泉井久之助訳)『アエ

ネーイス』(上)、岩波文庫 1991(1976)、pp. 345-424。

4) *Il Romanzo Arturiano di Rustichello da Pisa*, Edizione critica, traduzione e commento a cura di Fabrizio Cigni, Pisa Pacini 1994, pp. 21(写本), 233(転記), 298(イタリア語訳)。

5) 前掲拙著 pp. 687-701。